

第49回 学校評議員会 会議録

令和5年2月6日(月) 10:00~11:30

弘前高等学校 応接室

出席者 評議員 5名…赤石茂、中根明夫、川村能人、木村宏、中井浩二

学校側 校長、教頭(司会)、事務長、教務部主任、生徒指導部主任
進路指導部主任、教務部員(記録)

1 校長挨拶

校長 : 近年、学校を取り巻く状況が変わってきた。弘前高校の良さを守っていくためには、我々自身が変わらなければならない。「同じであり続けたいのであれば変わらなければならない」という言葉があるように、数年先を考えると「弘高ねふた」は現状のままでの継続は難しくなる。2学年の「探究」における課題研究においても学校内だけでの学びではなく必要に応じて弘前大学、地域行政とのつながりのある活動となっている。学び方を学ぶ、大学への学びへとつながる、社会に対して学んでいくスタイルを身に付けて欲しいと考えている。働き方改革についても、現実的に部活動を掛け持ちするなど負担は増している。部活動の地域移行なども検討されている中、地域との連携というのも考えていかなければならない。新しい時代に対応した高等学校改革では、これまでのような閉ざされた学校では限界があるとされている。よって、高等学校と関係機関との連携協力体制の整備に努めることを求められている。また、地域の行政機関との連携協力体制を整備し、社会に開かれた教育課程の具現化が求められている。弘前高校だからということでは済まされない時代になっている。

次年度の校内体制と改善策について、教務部ではICTの推進・継続・定着、生徒指導部ではねふたに関わる諸手続きの見える化、渉外部では140年記念事業、図書部は情報集約機関として探究活動の推進と機能強化を進めている。

校長及び教員としての資質向上に関する指標の策定に関する指針改正では、いままでのように一般的に教員の資質向上が求められるだけでなく、校長として求められることも明確化されている。①教職員の資質向上などの人材育成、②アセスメント能力、③ファシリテーション能力などのことが求められている。

12月に行われた全校集会において以下のような話をした。弘高ねふた

というものは体験することによって学ぶという典型的な活動である。弘前大学の医学部面接でも弘高ねぶたの意義を問われている。これは体験を自分のものとして言語化しているかという意図の質問である。生徒の回答として出てくるものには、自己発見や人間関係、マネジメント能力や創意工夫、試行錯誤などがある。私としてはさらにねぶた運行までにいたる手続きまで経験させ体験的な学びをさせたいと思っている。

スクールポリシーに関して、弘前高校は「持って生まれたものを深くさぐって強く引き出す」というぶれないポリシーがある。これをもとにスクールミッションが策定されている。文系理系などに偏ることない人材育成を目指していきたい。こうしたものを中学校や地域の人たちに伝えていき、5年後10年後も弘前高校としてあり続けたい。

2 現状報告（教務部、生徒指導部、進路指導部）

教務部主任：学校評価のための保護者によるアンケート集計結果について、IT化が進む中でスマートフォン等を利用してのアンケートを実施できるようになったため、多くの保護者からの回答および意見等を出していただけるようになった。評価の良いものとしては、「ねぶた制作における人間形成について」が挙げられるが、3年ぶりのねぶた運行開催を受けて多くの保護者から続けて欲しいという意見が寄せられた。評価の低かったものとしては、「生徒の悩みに対する適切な指導」に関わる回答で成績下位者に対する支援についての意見があり、これについては学校として真摯に受け止めていかなければならない。

保護者からの質問事項に関する回答は学校のwebページ上で回答する予定であるが、いくつか取り上げると保護者から寄せられる要望としては施設設備に関する「ロッカーの設置」についての御意見が毎年寄せられている。建築基準法等との兼ね合いでなかなか難しいが、これについてはなんとか改善していきたいと考えている。次に「リモート授業をしてほしい」という御意見に関して、今年度全生徒へのタブレット端末の配布が行われ、これらを利用した学習の体制ができつつある。現在、様々な学習支援に取り組んでいるが、今後さらに推し進めていかなければならない。生徒からの授業アンケートに関しては、昨年と大きな変化はないものの、教科に応じてそれぞれの課題に関して指導改善に生かしていきたい。

職員による自己評価に関しては、学校運営に関する「休暇の利用」に関して低い評価となっていることは真摯に受け止め改善していかなければならない。教務部としては「情報機器の適切な活用」について低く、今後教員の研修に努め、改善していこうと考えている。

最後に学校説明会についての報告として、今年度はコロナ禍ではあるものの、対面実施とオンライン実施のハイブリッド形式での実施としたことで、多くの生徒・保護者の参加が可能となった。また、遠方の生徒はオンラインで参加できるようになった。

生徒指導部主任 : 今年度の実施行事に関して、昨年度はコロナの影響により多くの行事が中止となったが、今年度は制限がある中でもたくさんの行事が実施できた。中止となったものとしては夏休み明けの表彰式、10月の降下訓練が中止となっている。今年度は3年ぶりにねぶた運行ができたということが非常に大きい。

部活動に関して、今年度全国大会に出場した部としては、テニス部、ボウリング部、弓道部、放送局、文芸部が全国大会に出場している。東北大会には資料内にあるように多くの部活動が出場している。

生徒指導部主任 : 推薦型、総合型選抜入試の合格者および出願状況について、推薦型、総合型選抜入試に関しては、現在合格者数13名となっている。出願状況としては今年度の3学年の特徴として、東北大学への出願者が例年よりもやや多い点が挙げられる。その他、弘前大学59名、東京大学6名、京都大学2名の出願となっている。今現在は講座制の授業で最後の指導をしているところであり、最後まで生徒への支援を行っていきたい。

1、2学年の進路志望状況について、1学年はほとんどが国公立大学を志望している。志望学部としては、社会科学系である法学・経済、それ以外では医学、薬学の志望が高いが全国的な傾向である。2学年もほぼ同様の傾向であるが、2学年に関しては東北大学志望者が非常に多いという特徴がある。生徒の志望を達成させるためにも進路指導部としては、授業の質を高めるという点を先生方へ訴えている。良い授業を生徒へ提供できるように、進路指導部として先生方への情報提供などを行い、先生方及び生徒を支援していきたい。

3 校内一巡

学校側参加者と共に校内を一巡し、3時間目の授業を参観した。

4 意見交換及び質疑応答及び 5 学校関係者評価について

教頭 : 意見交換及び質疑応答については、学校評価と併せた形での質疑応答とさせていただきたい。まずは学習指導に関して、御質問・御意見をいただきたい。

評議員 中根 : ICTの活用に関しては、対面授業とオンライン授業という形で今後常にハイブリッド形式で行っていくのか。それとも別々に分けて行っていくのか。

校長 : 授業そのものをオンライン等ですべて行うというのではなく、授業の中に効率よくICTを活用していく意味合いである。休んだ生徒への何らかの学習支援というのは行っていくが、全教科をオンラインでリモート実施するというものではない。

評議員 中根 : 教員に対するICTの資質向上について、全教員を均等にそのレベルに持っていくことを目標にするのか。

校長 : 本当に苦手な教員にそれを求めることは難しいため、苦手な教員の底上げをしつつ、先行している教員はどんどん活用してもらおう。最低限の活用方法などは提示しつつ、枠にはめない形で活用させていきたい。

教務部主任 : 教員のタブレットがまだ貸与されていない状況であり、今月末にようやく貸与される予定である。まず教員側が利用の仕方を理解してこそその生徒の活用であり、全教員への貸与がなされた3月に教員への研修を予定しているところである。

評議員 中根 : こうしたタブレット端末利用などは非常に良いことだが、困るのはトラブルシューティングかと思う。それを考えると確かに先生方が使い方を理解していることが大事だと思う。

- 教頭 : 昨今、ICTの推進ということが言われているが、ICTを導入していくということについては一定の成果があったように思われる。また、アクティブラーニングという形で生徒同士の意見交換などの場面を取り入れていくということも行われている。
- 教頭 : 生徒指導について、御質問・御意見をいただきたい。
- 評議員 川村 : 部活動に関して、年間104日の休日を確保するというのは可能なのか。
- 生徒指導部主任 : 年間104日の休みというのは国の部活動方針で出されている指針である。週休日やテスト期間、年末年始等を合わせると104日は可能である。
- 校長 : 文部科学省などから出されている国のガイドラインとして年間104日というのが示されている。ただし、大会が近いなどその状況に合わせて週休日を通常通り取れないなどは出てくるものの、年間を通じて104日を確保するという指針である。
- 評議員 木村 : 生徒たちは少ない活動時間の中で本当によく頑張っていると思う。練習時間が短い中で本当に工夫して頑張っていると思う。
- 評議員 川村 : 部活動は先生方が毎日練習についているのか。
- 生徒指導部主任 : 基本的に顧問の先生が部活動についているが、必ずしも専門的指導を行える教員ばかりではない。しかし、本校生徒は自主的に計画を立て練習を行っている。
- 教頭 : 放送局は今年度、全国大会に出場しアナウンス部門で2位になっている。専門的指導が成績に大きく関わるとされている分野であるが、本校は生徒同士、先輩後輩が指導し合っってこのような成績を上げていることは本当にすごいことである。

評議員 中井 : コロナ禍で様々なことができなかった。子どもたちは本当に高校時代の思い出が無いまま高校生活を終えて卒業していく中、今年度はねぷた運行を行えたことが、子供たちを見ていて本当に良かったと思う。

評議員 中井 : 年々、大学願書出願が多様化している。ネット出願などは項目が非常に増えて、出願が本当に複雑化してきている。在学中は良いのだが、浪人する場合に誰の指導も受けることができなくなるため、出願指導も留意して指導していただけるとありがたい。

また、ロッカーの件はやはり改善した方がよい。衛生的に考えても現在の状況は良くない。中学校では空き教室を利用してロッカー室にしたという例もある。

進路指導主任 : ネット出願は学校側が介入できない部分がほとんどである。手続きそのものが出願者本人にしか分からないため、こちらができる指導としては、日々の指導の中で入力ミスがないようなチェック習慣などを指導していくことと考えている。こちら側のチェックとしては、出願後に一度、出願書類を持ってきてもらうという形で行っているものの、ネット出願後は、訂正が不可能であるということも事実である。

教頭 : ロッカーの設置に関しては、生徒たちのニーズを考え活用のしやすさ、衛生面、消防法に係る面など総合的に考えながら検討している。

教頭 : キャリア教育の推進について御質問・御意見をいただきたい。

評議員 木村 : 生徒の悩みについて適切な指導が行われているかという質問事項について、生徒の学習の悩みについて成績下位者の生徒の底上げの指導をしていただければ有り難い。

教務部主任 : 担任が生徒との個人面談を頻繁に実施しており、そのような機会を利用しながら、教員間で情報共有して支援を行っている。先ほども話題となった ICT の活用なども大いに利用しながら支援していきたい。

評議員 川村 : 先ほど進路指導部からのお話にあった東大、京大などの指導というのはそれぞれの志望に応じた指導をしているということか。

進路指導主任 : 共通テスト後に、「講座制」という名称で進路に応じて講座を設けて、生徒の受験科目に応じて授業を受けるという形式で行っている。

評議員 川村 : 人数が殺到して人数超過になるということはないのか。

進路指導主任 : 人数が多くなる場合は、2 クラスに分けて実施したりするなど対応している。また、多目的教室などは 60 名程度に対応できる。

教頭 : スクール・ミッションの策定とスクール・ポリシーの公表について御質問・御意見をいただきたい。

評議員 木村 : 学校長の資料にあるように、「とがった弘高生」というのを作ってほしい。

教頭 : その他、全体を通して何か御意見等いただきたい。

評議員 赤石 : 先生方の目標達成度の自己評価は「B」となっているが、先生方は本当にスクラムを組んでよくやってくれている。A とすべき項目が多々あると思うが、学校が様々変わってきている中で子どもたちにとって良い方向に向かっていると思う。子どもたちの個性を生かしながら、子供たちを良い方向へ導いていく校風ができつつあると思う。これからも先生方は校長とともにスクラムを組んで頑張っていってほしいと思う。

6 その他

教頭 : その他として、次年度に関わることを校長よりお話いただく。

校長 : 学校評議員会に関しては、平成 13 年から始まり年 2 回 22 年間実施してきた。様々取り巻く状況が変わってきている中、学校評議員会という形のものとしては今年度が最後となる。実施後の評価という形で行われてきた学校評議員会から、今後は実施前に意見を伺えるような形の組織へと作り変えていこうと考えている。次年度以降は学校評議員会を別の組織に改変することを検討しているが、改めて評議員の皆様には感謝を申し上げたいと思う。